

## 学位論文内容の要旨

		要 旨
学位申請者	<p style="text-align: center;">木村 迪子 【比較社会文化学専攻 平成21年度生】</p>	
論文題目	<p style="text-align: center;">浅井了意と仏教 ——仏書における典拠と仮名草子との関わりに注目して——</p>	<p>本論文は、江戸時代前期に活躍した仮名草子作家、浅井了意の著述のうち、仏書について内容的検討を試みたものである。了意は『伽婢子』『狗張子』のような仮名草子で文学史上著名な作家ではあるが、浄土真宗の僧侶であり、著作活動の初期から、一般に「鼓吹物」と呼ばれる一般性のある仏書（経典のわかりやすい注解の類）を多く執筆してきたのである。しかし、日本文学研究の側からは了意の仏書は取り上げられず、仏教史研究の側からも通俗的仏書に関する研究は進まなかったため、昭和40年代の北条秀雄による一連の研究以外に見るべきものがなかった。</p>
審査委員	(主査) 教授 浅田 徹	<p>木村氏は、仮名草子研究で一般的に取られている手法、すなわち著作の典拠研究を了意仏書に適用し、浄土三部経の大部な注解『無量寿経鼓吹』『阿弥陀経鼓吹』『観無量寿経鼓吹』がそれぞれどのような典拠に基づいて執筆されているかを調査した。それにより、真宗の僧侶である了意が、何故か真宗の文献でなく、浄土宗の文献を材料としてこれらの作品を著していることを明らかにした。その後の仏書も続けて検討した結果、了意は一般に言われてきたような「真宗の学僧」だったのではなく、むしろ真宗の権威ある文献を使うことの自由にならない状況で執筆を続けざるを得なかったのではないかという、全く新しい議論を打ち出すに至った（第一章）。次に、『密厳上人行状記』を中心として、了意と仏書の出版という問題を取り上げ、現存する諸版本の詳細な調査と典拠調査によって、真言宗の上人伝に了意が自由な態度で臨み、真言宗側の反発を招きつつ、しかしその練達の技量によって、正規の上人伝よりも広い読者層を獲得したことを指摘する。これは『愚迷発心集直談』の場合にも見受けられることである（第二章）。最後に、仮名草子の執筆において、仏教文献がどのように利用されていたかを、『安倍晴明物語』等によって確認し、ジャンルを超えた了意の創作のあり方を明らかにした（第三章）。</p> <p>最後に、了意仏書のうち、真作かどうか曖昧であったものの検討などに本論文の成果が活かせるであろうことを展望している。</p>
	准教授 松岡 智之	
	教授 神田 由築	
	講師 藤川 玲満	
	教授（東京大学文学部） 頼住 光子	